

## 明暦3年の大火後の江戸の街 23.1.6

長屋門の形態や構造を調べているうち、武家屋敷の長屋門や表門はどうなっているのかを調べてみようと思いたちました。

さいたま市の長屋門を調査する前から上野博物館にある黒門のことは知っていましたが、詳しいことは知りませんでした。

以前、当 HP にレポート 2022.11.6 「大名とは、その屋敷と表門」に、黒門のこと：鳥取藩・池田家上屋敷の門や山脇学園の門の「岡崎藩本多美濃守忠民の江戸上屋敷の表門」・幕府老中屋敷の表門についてふれましたが、その武家屋敷の表門の詳しい構造については知らなかったもので、国立図書館に依頼し二軒の図面を取り寄せました。

図面をみると柱や梁そして棧梁などは太い材で構成されていますが、基本的にはさいたま市にある長屋門の構造と類似しています。

ただ表門は幕府によって武家の格式によっての形式が規定されていました。



この表門は江戸後期のもので、建物の各部材に金物などで装飾をし、表門としての品格を表しています。ところが江戸の明暦3年の大火の前に武家屋敷と表門は豪華絢爛たる造りだったそうです。このことは当 HP の 2022.8.6 「江戸前期・大名屋敷の表門」にレポートしました。江戸城の回りの武家屋敷と表門は観光名所となり一般の人々が見学におとずれるほどだったそうです、その様子が「江戸図屏風」に描かれています。

明暦3年前の江戸の中心部は華やかな街並みを呈していました。



御三家の屋敷と表門

ところが明暦3年の大火がおき、その後の街はどんなになたのだろうかに興味を覚えました。

その様子を表した書籍、「江戸名所図会の世界」千葉正樹著を見つけ目を通してました。それによると「屋根から見た都市景観分布」の項の中で、「江戸名所図会」の挿図の多くは俯瞰表現であり、景観は屋根の連なりとして描かれていることから景観の分布を分析する第一の理由であり、この時代の江戸民家は、①土蔵造り＝瓦葺で壁・軒裏・建具をすべて厚い漆喰塗りしたもの、②塗や造り＝瓦葺で特に二階部分を漆喰塗とするが、一般に一階は木造とするもの、③焼屋＝板葺板張りでまったく耐火的配慮を行わないもの、の三種類がある。①は大商人の店蔵、②は地借層の住宅、③は店子層の住居に多いといわれてきた。すなわち、『江戸名所図絵』の瓦葺は家持あるいは地借層の家屋、板葺は店借層のそれを映しだしていた可能性が高い。第二の理由として屋根の分布によって文政期江戸町方の社会と空間の関係を具体的に把握することが期待出来る、と言っている。近世の屋根材としては、瓦、板、茅、さらに土や牡蠣殻などが使われていたが、これらが一般的であった。

「江戸名所図会」の指図は、対象と視点との距離によって①近景＝視点距離 10m以内で男女、身分、職業など、精密に描き分けている。②中景＝簡略されているが人物の服装・容貌が判別可能で数十メートル。③遠景＝対象から100メートル以上、武士＝二本差しなどのパターンで描かれているが、人物の属性は判別できないなど。④超遠景＝対象から数百メートル、人物は縦の短い線となっている。



図会に描かれている屋根材料の茅葺・瓦葺・板葺の分布を見てみると、江戸の中心部には、佃島漁師町をのぞいて茅葺はみられない。周辺部は、三田から高輪、品川にかけては茅葺景観が見られる。「江戸名所絵図会」における茅葺景観の分布図参照。

瓦葺の町場は府内、ほぼ全域にわたって見られるが、特に江戸城東側の隅田川西岸地区で色濃い。さらに北品川まで達している。南西部では外堀に外接する赤坂までが純瓦葺景観

屋根表現 限界となっている。

城西では外堀から1キロの市ヶ谷・牛込までが分布域となる、など「江戸名所絵図会」における瓦葺景観の分布図参照。

板葺のある地域は純瓦葺の景観が集中する中央部から純瓦葺景観の分布域からやや外側まで散在している、などである。「江戸名所絵図会」における板葺景観の分布図参照。

とあり、さらに「文政期江戸の都市景観構造」について上記の地図を重ねたみた結果を記述しています。「江戸名所図会」に町方景観構造参照。

